

令和4年度豆類需給安定会議、 令和4年度豆類産地懇談会、 第68回豆類生産流通懇談会の開催

(一社)全国豆類協会 (公財)日本豆類協会

豆類の生産・流通・加工業界、行政・試験研究等の関係者が一堂に会し、豆類の主産地十勝の作況を視察するとともに、今後の需給状況に関する情報・意見を交換し、道産豆類に対する理解をより一層深め、豆類の生産・流通の安定と消費の維持・確保を図ることを目的として、(公社)北海道豆類価格安定基金協会、全国豆類振興会及び北海道豆類振興会の3者の共催により、令和4年度豆類需給安定会議、令和4年度豆類産地懇談会、第68回豆類生産流通懇談会の合同会議が、9月7日(水)に北海道帯広市で開催されました。

新型コロナ禍によって、一昨年は開催中止、去年はオンライン開催であったため、現地での開催は3年ぶりとなりました。

1. 現地作況調査

会議の開催に先だって、まず、午前中に、帯広市及び更別村の3カ所のほ場で小豆、手亡及び金時豆の生育状況の現地作況調査が行われ、約40名が参加しました。

- (1) 帯広市富士町 中井氏ほ場 (小豆)
- (2) 更別村勢雄 橋本氏ほ場 (手亡)
- (3) 更別村北更別 吉田氏ほ場 (金時豆)

今回の調査は、新型コロナ感染対策の観点から、ほ場側で調査を行うことを避け、バス内からほ場の状況を観察するとともに、十勝農業改良普及センターの担当者から本年産の作柄等について説明が行われ、小豆、手亡、金時豆とも、生育はほぼ平年並み、収量はやや良～平年並みの見込みとの状況でした。



2. 合同会議

午後には、ホテル日航ノースランド帯広において、合同会議が開催され、豆類の生産・流通・加工業界、行政・試験研究等の関係者約70名が出席しました。



(1) 来賓挨拶

主催者挨拶の後、来賓の農林水産省農産局穀物課高宮係長から挨拶を兼ねて「小豆をめぐる現状・課題」として、小豆の需給や生産の動向、農林水産省の支援策などの説明が行われました。

(2) 現地作況報告

十勝農業試験場堀内主査から、8月20日現在の十勝農業試験場内ほ場の豆類の作況は、小豆はやや良、金時類はやや良、手亡類はやや不良との報告が行われました。

(3) 話題提供

豆類の生産、輸入、試験研究を担当されている3名の方から話題提供が行われました。

- ①ホクレン農産部松村雑穀課長からは、本年産の道産豆類の生育状況等について「本年は雨が非常に多いと心配したが、積算温度も確保され、生育・作柄はおおむね順調」、また、来年産の作付について、「新型コロナで落ちた需要は回復傾向にあり、来年産についても作付拡大が必要」との説明がありました。

②雑穀輸入協議会鈴木副理事長からは、「近年の輸入小豆の主力であるカナダ産については、大豆やとうもろこしなど主要穀物の高騰により、前年に続き小豆の栽培意欲が低迷し、日本側の希望面積を確保できなかった」など、小豆・白糸いんげん豆の海外主要輸出国の本年産の状況についての説明がありました。

③十勝農業試験場堀内主査からは、試験場における小豆・いんげん豆育種の現状として、「小豆についてはコンバイン収穫適性や加工適性（食味、あん色）を、手亡については耐倒伏性を、金時豆については収量性を主たる目標として育種に取り組んでいる」などの説明がありました。

（４）意見交換

（株）矢野経済研究所大籠主任研究員から、2020～2021年に実施された「豆関連産業への新型コロナウイルスの影響と産業持続化への取り組みに関する調査」についての報告が行われた後、佐藤久泰氏をコーディネーターとして「需給環境の変化に合わせた安定供給の構築について」をテーマに意見交換が行われました。

意見交換で出された主な意見は以下のとおりです。

- 豆の利用拡大のためには、和菓子など既存製品の需要を維持していく中で、新商品の開発など新たな分野での利用を拡大することが重要。
- 新たな分野という観点では、和菓子だけでなく洋菓子でも豆を使ってもらうこと、家庭での豆の利用を広げていくことに力を入れている。
- 進物用、お供え用の購入等が減っている中で、豆のおいしさ・健康性等に加え、新たな豆の楽しみ方について情報発信していくことが必要。
- 豆が健康に良いことは理解してもらえたとしても、実際に豆を食べてもらうまでには更にいろいろ工夫が必要。
- 豆は「乾物」ではなく食物繊維やポリフェノールが豊富な「野菜」であるという認識をもってもらうことが重要。また、若い人が好むような味付けの製品を開発することが必要。
- 量販店などで豆は乾物売り場で目立たない。もっと目につくような商品として工夫を行うことが必要。
- 大衆食品として豆製品を作るには、原料となる豆の価格が安定していることが必要。

- 輸入豆の価格が高騰し、国産との価格差が小さくなっている。今こそ北海道の生産者に頑張ってもらいたい。
- 豆の価格は40年間変わっていない。生産者も努力していることを理解して欲しい。
- 作った豆が喜んで食べてもらえていることを実感することが生産者の意欲向上につながる。生産者と実需者・消費者の交流を進めることが重要。
- 小豆から手間のかからない大豆の作付けへとシフトが進んでいるが、小豆についてもコンバイン収穫が可能な品種の開発を急いでもらいたい。
- 契約栽培を進めるに当たっては、大手企業だけでなく、中小の商店にもそのメリットが及ぶようにすることが、需要拡大につながることに留意してもらいたい。
- 北海道産豆類については、国内消費にとどまらず輸出についても考えていくことが必要。